

〔報 告〕

甘露寺と福建省の古刹

Ganlu-si and Ancient Architectures in Fujian Province, China

鈴木 智大・中島 俊博・浅川 滋男

SUZUKI Tomohiro, NAKASHIMA Toshihiro, ASAKAWA Shigeo

要旨：福建省泰寧の甘露寺は丹霞地形の洞穴内に境内を構える寺院で、南宋紹興16年（1146）に建立された。洞穴内の建物はすべて懸造であり、山陰地方の岩窟・岩陰型仏堂とよく似ている。また、鎌倉時代初期における東大寺大仏殿の再建にあたって、日本人が視察に来たという寺伝を残している。2012年の調査では、甘露寺とともに中国南方最古の木造建築として知られる華林寺大殿を調査した。本稿では、この二つの古刹を軸に据えながら、元代以前の福建古建築を網羅的に取り上げ、その構造と意匠の変遷を再考した。その結果、福建の古建築は中国の他地域に比べ著しく古式を有し、日本の大仏様はそれを選択的に受容したことを再確認した。

【キーワード】 福建、大仏様、懸造、丹霞地形、洞穴

Abstract : Ganlu-si, located in Taining, Fujian Province, is a temple precinct set up in a large Danxia landform cave. It was constructed in 1146 during the Southern Song dynasty. All the buildings in the cave are the overhang style (*kakezukuri*), and are very similar to the Buddhist temple compounds found in rock caves or shelters in the San-in district of Japan. In addition, according to temple legend, Ganlu-si was visited by Japanese in preparation for rebuilding the Great Buddha Hall of Todai-ji temple in the early Kamakura era. In 2012 we investigated not only Ganlu-si, but also the main hall of Hualing-si temple, famous as the oldest timber building in South China. In this paper, using these two ancient temples as the focal point, we comprehensively examined ancient Fujian architecture constructed before the Yuan dynasty and reconsidered the changes in structure and design. The results confirm both that ancient architecture in Fujian shows strikingly older characteristics than architecture in other areas of China, and that the construction of the *Daibutsuyo* in the early Kamakura era in Japan selectively incorporated these characteristics.

【Keywords】 Fujian, Daibutsuyo, Overhang style (*kakezukuri*), Danxia landform, Caves

1. 福建丹霞と甘露寺

1-1 世界自然遺産「福建丹霞」

(1) 武夷山の地形と文化

1999年、福建省の風景区「武夷山」が世界複合遺産に登録された。2013年現在、世界遺産の総数は981件に及び、その内訳は文化遺産759件、自然遺産193件、複合遺産29件を数える。複合遺産は文化遺産と自然遺産の両方の価値を備えたものである。武夷山の場合、自然遺産と

しての価値は後述する「丹霞地形」を評価されたものである。一方、文化遺産としての価値は多様であり、①「朱子学」誕生の場、②岩茶の原木を残す茶畑の文化的景観、③古代「閩越」の文化などが総合的に評価された。世界複合遺産登録後、多くの観光客を集め、今では年間350万人が武夷山風景区を訪れる。とくに有名な景勝地は、一枚の巨大な「砂利岩」（砂岩と礫岩の複合した岩）でできた天遊峰（標高404m）であり、アジア最大の「岩」

だと現地のご案内人は誇らしげに語る。そうした地質学的価値もさることながら、山頂から望む九曲溪と丹霞地形のパノラマは圧巻である(図1)。

武夷山は他にも多くの景勝地を含むが、ここでは水簾洞を紹介しておく。水簾洞の水簾(水のすだれ)とは、丹霞巨岩の頂から流れ落ちる滝のことである。その絶壁の根元がやや窪んでおり、「三賢祠」と称する廟堂を構える(図2)。その三賢祠が水の簾に霞んでみえる。三賢祠の内部は一室で、中央に朱熹の師匠の劉子(屏山先生)、向かって左に朱熹、右に朱熹の兄弟子にあたる劉甫の像を祀る。この平屋の建物はもともと屏山先生祠として南宋紹興17年(1147)に創建されたものであり、後に劉甫と朱熹の像が加わって「三賢祠」と呼ばれるようになった。棟桁・母屋桁に民國12年(1923)の銘が残り、この年の重建と知られる。三賢祠と滝の複合する景観は鱉淵寺浮浪滝・藏王堂(出雲市別所町)を彷彿とさせる(図3)。ここに紹介した所以である。

(2) 丹霞とは何か

1999年に世界複合遺産に登録された武夷山は、丹霞地形によって自然遺産としての価値を評価されたわけだが、丹霞地形は中国南部のひろい範囲に分布している。2009年、福建省泰寧、広東省丹霞山、江西省竜虎山が世界ジオパーク・ネットワークに加盟認定され、翌2010年には、この3ヶ所に貴州省赤水、湖南省莫山、浙江省江郎山を加えた広大なエリアが「中国丹霞」として世界自然遺産に登録された。主として白亜紀の赤みがかかった「砂利岩」(砂岩+礫岩)によって形成された隆起地形であり、丹霞山の山号に因んで「丹霞層」という呼称が1928年に使われ、1939年に地質学者の陳国達が「丹霞地形」という用語を初めて使った。

福建省武夷山・泰寧の丹霞は幼年期の好例で、深く狭い溪谷がいくつもみられる(図4)。壮年期から老年期に至ると、さらに侵食が進んで溪谷が拡がり、孤立した塔のような地形に変わってゆく。その典型例として、丹霞山の陽元石がよく知られており、世界複合遺産「 Cappadocia」(トルコ)のキノコ岩を彷彿とさせる。こうして形成される景観はカルスト地形とよく似ている。カルスト地形が石灰岩であるのに対し、丹霞地形は「砂利岩」(砂岩+礫岩)で成り立っている。このため、丹霞を「カルスト地形もどき」と呼ぶこともある。丹霞地形は、侵食作用によって多様な洞穴が形成されるが、それらはどちらかというと浅く、孤立している。一方、カルスト地形では鍾乳洞がしばしば深く入り組み、地下通路のように繋がっている。浅い丹霞の洞穴は古くからヒトに利用されてきた。後で述べる甘露寺などの仏教寺院も

その一例である。

(3) 丹霞視察の目的

2012年の8月31日から9月5日まで鳥取環境大学隊(浅川・中島他)は中国福建省を訪問し、武夷山から泰寧にかけて丹霞の地形を歩きまわった。当時、鳥取市覚寺の摩尼山と摩尼寺「奥の院」遺跡の環境整備を進めていた¹⁾。環境整備の前提として、砂丘に近い摩尼山が山陰海岸ジオパークに含まれていることに着目し、巨岩の露出する摩尼寺「奥の院」遺跡を「山のジオパーク」に位置付けようと模索していた時期にあたる。このため「山のジオパーク」の先駆例を視察し、保全活用のあり方を学ぼうとしたのである。福建丹霞の視察で得た成果は大きかった。「摩尼山を中核とする景勝地トライアングル」²⁾の整備構想の有効なモデルとなった。

収穫の大きな旅ではあったけれども、世界ジオパークとしての丹霞地形は、中国南部のひろい範囲に存在しているのだから、福建省にこだわる必要はない。しかし、フィールドは福建省でなければならなかった。わたしたちが摩尼寺の「奥の院」を発掘調査したのは、三徳山を主題とする鳥取県の世界遺産活動が頓挫した状態にあり、山陰の山岳仏教遺産の厳密な再検討を迫られていたからである。とりわけ岩窟・岩陰複合型の懸造仏堂を国内外の類例と比較して、その相対的な位置づけを明確にする必要があると考えていた³⁾。

その考察プロセスのなかで、しばしば「投入堂(や岩屋堂)は日本の石窟寺院だ」と発言するようになり、華北、西域、西インドなどの石窟寺院を視察し続けた。その結果、日本の岩窟・岩陰型仏堂は中国の礼拝窟が圧縮する形で平安時代中期以降の山岳密教寺院にもたらされたものであろうと推定するに至った。ただし、木造建築と岩窟(石窟)の関係には相当な違いがある。雲岡に代表される華北の礼拝窟では石窟を塞ぐように木造の楼閣



図1 天遊峰(武夷山風景区)から望むパノラマ



図2 水簾洞と三賢祠（武夷山風景区）左：調査時（湯水）右：絵ハガキ

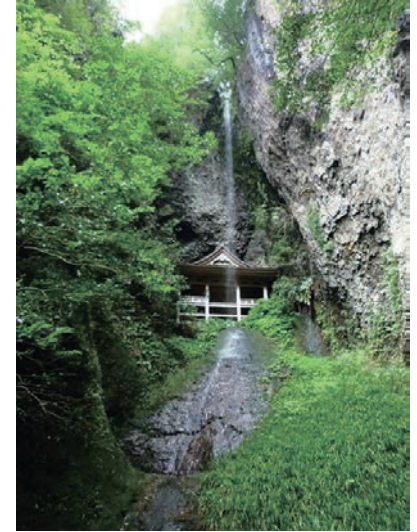


図3 鱗淵寺浮浪滝と蔵王堂（出雲市別所町）

建築を設ける一方、窟内壁面の各所に木造建築の細部を浮彫り表現し、全体を平地の木造建築に近づけようとしている。ところが、山陰地方の岩窟・岩陰型仏堂、すなわち三仏寺投入堂・不動院岩屋堂・焼火神社本殿（旧焼火山雲上寺本堂）などは岩窟の内部に懸造の堂宇をすっぽり納めている。華北の石窟を直写した遺構は朝鮮半島にも日本列島にも存在しない。ただ、大分県国東半島六郷満山の「奥の院」本堂（宇佐神宮の影響による神仏習合で「本殿」と呼ぶ寺が多い）には、岩窟を覆い隠すようにして入母屋造の懸造礼堂を設ける例が少なからずある。大分県の場合、平安中期～鎌倉初期の磨崖仏が卓越しており、それを保護する掛屋もかつては存在した。岩窟仏堂と磨崖仏の両方が華北の石窟寺院との系譜関係を想定しうるであろう。

一方、山陰に古代の磨崖仏はなく、岩窟・岩陰型仏堂のスタイルも大分とは異なっている。そういう山陰の懸造仏堂は、日本独自のスタイルかとも思っていたのだが、2010年2月の「大山・隠岐・三徳山」シンポジウムに招聘した楊鴻勛氏（中国建築史学会理事長）が若桜町の不動院岩屋堂を視察された際、「岩屋堂は南宋の建築様式に近く、岩窟との複合性は福建省泰寧の甘露寺に類例がある」と示唆されたことで、甘露寺が一躍注目を集めるようになった⁴⁾。甘露寺については、おもに台湾からの旅客による紀行文等がネット上に出回っており、多くの写真が掲載されている。楊氏の指摘通り、泰寧の丹霞地形の窪みのなかに巨大な懸造建築が納まってみえた。ただし、建築そのものは軒反りが強すぎるところなど、宋代まで遡るとは考えられず、清代以降の再建にかかるものであろうと予測していた。いずれにしても、これを視

察することなく、投入堂や岩屋堂の系譜を語れないので、現地調査に踏みきったのである。ところが、現地を訪問して案内板を読むと、南宋紹興16年（1146）建立の甘露寺は1961年に全焼していた。大雄宝殿の虹梁に「公元九六四甲辰年九月吉旦」の墨書が残り、現存する建造物群は1964年以降の再建と知られる。

帰国後、福建省文物管理委員会と張步騫が焼失前の甘露寺について報告し、関口欣也がその成果を短くまとめていることを知った⁵⁾。これについては福建古建築を網羅的に整理した次章で記述することとして、ここでは配置図（図8）を略測した現境内の建造物群とそれに関わる伝承について述べておく。

1-2 甘露寺を訪ねて

(1) 右鼓左鐘、廟在其中

甘露寺は泰寧風景区の金湖西岸、長灘人形山の西側にあって、南宋紹興16年（1146）に建立され、850年あまりの歴史がある⁶⁾。「一柱挿地、不仮片瓦（一本の柱を地面に突き刺し、瓦を葺かない）」という独特の建築構法を採用している。寺院は丹霞地形の巨岩の洞穴に隠れ、左側の石は頗る大きな鐘を象り、右側の石は天下無比の巨大な太鼓のようにみえる。このように甘露寺は鐘石と鼓石の間にあるので、「右鼓左鐘、廟（妙）はその中に在り」と形容されてきた。廟（寺院）が絶妙なるものと表現しているのである（図5）。

この洞穴を含む巨巖を「甘露岩」と呼んでいる。甘露岩はせり出した絶壁頂部に隠された天然の洞穴である。洞穴はとても大きく、高さ80m以上、上部の幅30m以上、下部の幅約10m、奥行20m以上を測る。洞穴の上方に龍



図4 寨下大峡谷 (泰寧風景区)

頭の形をした鍾乳石があり、甘美なしずく（甘露）を年中垂らしている。甘露岩という岩号はこの「甘美なしずく」に因んでいる。

逆三角形の洞穴は寺院の造営に向いているとは言えない。ある伝承によれば、南宋紹興年間に一人の遊行僧がこの洞穴を発見し、各所に人資の助けを求め、洞穴内での造寺を企てた。工匠たちは逆三角形の地勢に従い一柱を立ち上げて大きな基台を造作することを考案した。その一柱に「杉の王様」と呼ばれる巨木（高さ約30m・周長3.38m）を用いたので、甘露岩寺は「一柱撐天」の建築として名を馳せるに至った。

別の伝承もある。かつてこの寺院はとても小さく、送子観音（子授け観音菩薩）を祀っていた。北宋の時、葉祖洽という人物の母親は子供が欲しくて城（まち）から参拝に訪れ、「もし子供を授けられましたら必ずこのお寺を建て直します」と祈願した。その後、母親は子供を授かり、葉祖洽と命名した。その子は状元（科挙の最終試験を首席で合格した者）に出世し、寺の再建拡張に取り組んだ。このため一本柱は「状元柱」もしくは「如意柱」と呼ばれるようになったという（図6・7）。

(2) 洞穴内の建物配置

甘露岩の麓には浄手池がある。浄手池手前の広場から見上げてまず目をひくのが、大きな基台を支える状元柱である。この柱は、基台の大引1本のみを受け、前側のみ柱頭に組物を飾るが、基台全体は横材だけで支持されているようにもみえる。甘露寺の楼閣殿堂はすべてこの宙に浮いた木造基台上に建てられている。

基台から上の洞穴周辺には、西方三聖、大雄宝殿、地藏殿、観音殿、千手観音殿、僧坊4棟、弥勒菩薩を祀る祠など、計10棟の堂宇が軒を連ねる（図9）。これらすべてが懸造の構法を採用している。洞穴は2段になって



図5 甘露岩と甘露寺の全景



図6 甘露寺の基台を支える状元柱（1本柱）全景

いて、一段目の浅い岩陰に地藏殿、観音殿、千手観音殿、僧坊2棟が配され（図10）、さらに奥深い岩窟中央に西方三聖（図11）、大雄宝殿（図12）、祠、その両脇に僧坊2棟が建ち、それらは縁台と石段でつながる。僧坊以外の建物内部には仏像を祀る。眞田廣幸氏のヒアリングによると、本尊等仏像は以下のとおり。

西方三聖： 阿弥陀如来 立像（脇）不明

大雄宝殿： 釈迦如来 座像（脇）立像2体

地藏殿： 地藏菩薩 立像

観音殿： 南海観音 立像（脇）童子系立像2体

千手観音殿： 千手観音 立像（脇）童子系立像2体

祠（名称不明）： 弥勒菩薩 立像

(3) 堂宇の構造形式と細部

屋根は瓦を葺かない土塗りで、小屋組は穿斗式構法、内部の柱は木製礎盤の上に立つ。以上はすべての建物に共通する。以下、相違を示す。

1) 西方三聖・地藏殿・観音殿・千手観音殿は、大屋根を入母屋造とし、裳階を付けた平屋建。軒は三手先の詰組で受ける。壁はなく吹き抜け。庇は挿肘木風の板材を柱上に重ねて軒桁を支え、支輪で軒とつなぐ。板状の垂木は隅のみ扇垂木。僧坊2棟も同様の形式だが、詰組の中備を板欄間に替える。2) 大雄宝殿は平屋の入母屋造。軒は1タイプの裳階と同様。3) 西方三聖の両脇に建つ僧坊2棟は、切妻造2階建。2階部分を繰形付の持送りでせり出し、縁を設ける。この形式は、寨下大峡谷周辺の民家にもみられる。

(4) 重源の訪れた寺？

甘露寺は1960年代に焼失・再建されており、調査団に落胆がなかったと言えは嘘になってしまうが、その一方で予想もしていなかった情報を入手する。大金湖の船着き場を下りてまもなく甘露寺の案内板が設置してあり、

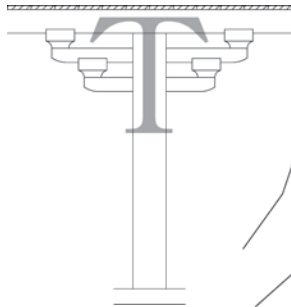


図7 「T形斗拱」のイメージ
(当初の状元柱)

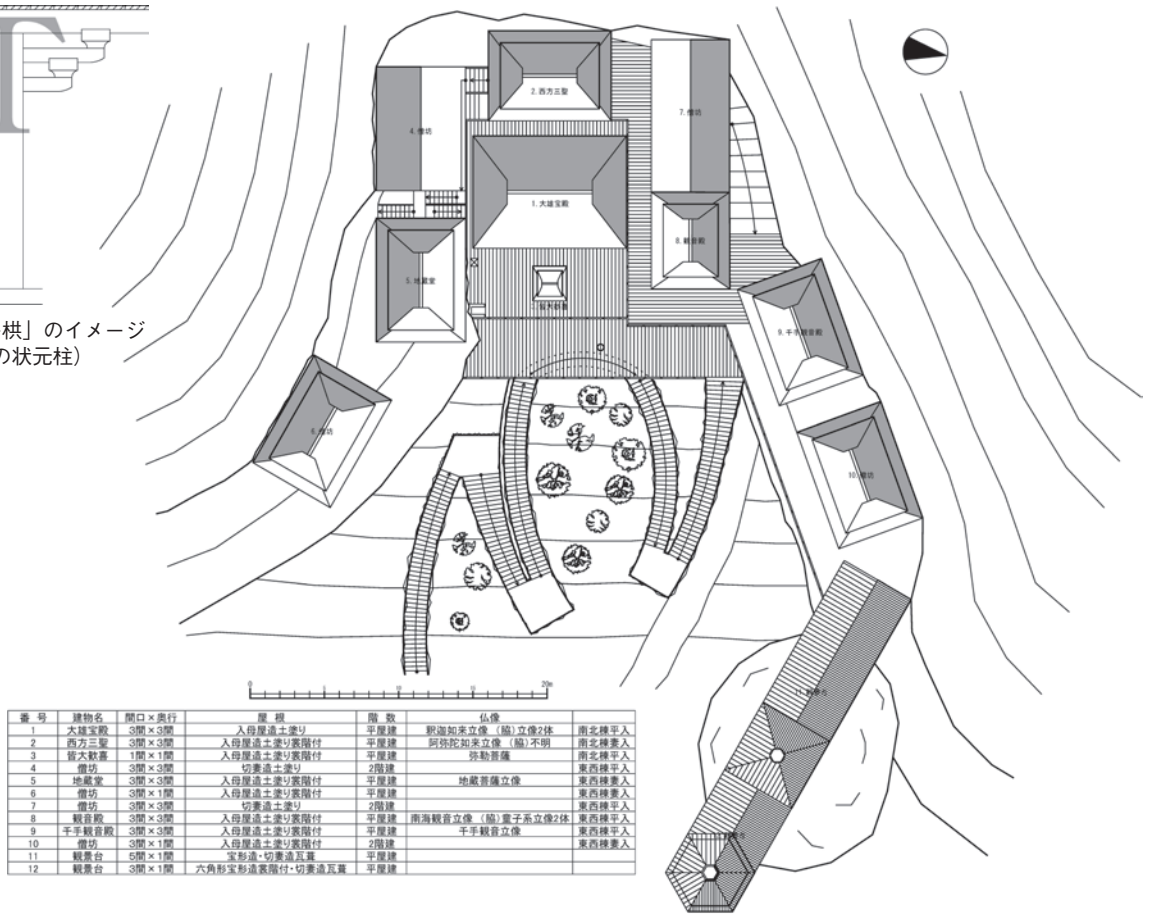


図8 甘露寺屋根伏図(実測:清水拓生、作図:中島俊博)



図9 甘露寺基台上的建造物群



図10 甘露寺一段目の建物にみられる懸造の構法(床下)

そこに「1180年、奈良の『東大仏殿』再建のために日本人が視察にきた」と書いてあるのだ。ここにいう「東大仏殿」はあきらかに「東大寺大仏殿」の誤記である。同じような情報はネット上でも散見され、たとえば台湾の『百度百科』甘露寺⁶⁾には、「考証によれば、12世紀に日本の名僧、重源法師が3度福建省を訪れて調査した際、甘露岩寺の建築工芸を学習して帰国し、世にも名高い奈良東大仏殿を再建した。大仏殿が大量に使用するT形斗拱(挿肘木=図8)は、まさに甘露岩寺のスタイルを採用したのであり、それを賞賛して『大仏様』と呼ぶようになった」と記している。現地でのヒアリングによれば、甘露岩寺のスタイルとは、とくに状元柱の組物(T形斗拱)と構法に代表されるものである。以下、時系列を整理しておく。

南宋紹興16年(1146)甘露寺建立

治承4年(1180)平重衡、東大寺・興福寺を焼き討ち
養和元年(1181)重源、入宋3度の経験をかわれ東大寺復興の大勲進聖に抜擢

建久6年(1195)東大寺大仏殿落慶供養

この年表をみる限り、東大寺火災の直後に日本人が甘露寺を視察したとしても不自然ではない。問題はその根拠である。日本人が来たという記録がどこにあるのか、という質問に対して、住職ほか甘露寺の関係者は一様に「博物館」と答えるのみで、どの博物館かも知らなかった。そして、寺は文書記録を所有していない。また、1960年代に再建された甘露寺の建築様式に大仏様の要素は希薄である。1本柱(状元柱)の組物をみても(図11)、挿肘木との関係を読み取り難い。焼失前の遺構については次章でも取り上げるが、すでに関口欣也⁵⁾が鬘閣・上殿・南安閣・観音閣を素材にして、以下のような見解を述べている。

このように甘露庵の南宋建築は簡単な鬘閣が柱頭に二手の根肘木を用い、他の裳階付三殿は大斗と中備の束柱を用い、中備の持送肘木は束柱に挿肘木とする。また外側の手先には秤肘木を組むが、内側は持送方向だけに肘木を出す。したがって甘露庵のこの三殿は腰組の挿肘木と通ずる所もあり、日本の大仏様と直結するものではない。

焼失前の状元柱(1本柱)組物については報告がなく、大仏様と比較できないのは残念なことである。

2. 福建の古建築—その構造と意匠

2-1 大仏様と福建省の古建築

福建の古建築と日本の大仏様建築の関連性については、グスタフ・エックらによって早くから指摘されていた⁷⁾。日本では、田中淡が中世新様式の挿肘木について考察するなかで、福建省の遺構に言及している⁸⁾。この議論を最も先鋭化させたのは傅熹年である。福建南宋代の遺構と日本の大仏様建築の共通点を明確に提示し⁹⁾、1998年度日本建築学会大会の建築歴史・意匠部門研究協議会「大仏様の源流を求めて」において田中淡がその研究成果を紹介している¹⁰⁾。その後、関口欣也がいくつかの事例を補い検討を加えるなかで、大仏様は南宋福建の建築様式を選択拡大したものという考えを示した¹¹⁾。このように、議論は着実に深まってきたが、いずれの論考も取りあげた福建古建築の遺構が限定的であり、網羅的な検討を通じて、先行研究の見通しを検証・補訂する必要がある。

ここでは、近年の中国における研究の状況や福建省での調査成果を通じて¹²⁾、より詳細な検討を加える。考察の対象は元代以前の遺構とし、できるかぎり遺漏なく残存遺構を取り上げたい。はじめに木造および木造を模し



図11 甘露寺西方三聖



図12 甘露寺大雄宝殿

た石造の殿堂、ついで木造を模した意匠を有する石・磚・陶造の塔をとりあげ¹³⁾、最後に架構と意匠の変遷を整理し、その意義を考察したい。

2-2 木造および石造の殿堂

まず現存する木造建築と石造の殿堂の計6件10棟を古いものから順に説明する(表1・19)。

(1) 華林寺大殿(福州市、呉越964年)

華林寺は福州城北の屏山南麓に位置する寺院である¹⁴⁾(図13・14)。呉越国、銭俶の18年(乾徳2年、964)に創建された越山吉祥禅院が前身とみられる。明・宣徳6年(1431)に「重建」され、正統9年(1444)に華林寺の額を賜ったとみられる。大殿は吉祥禅院創建時の遺構で、中国南方最古の木造建築として名高い。

歴代の増改築を受け、解放後には桁行7間×梁間8間の二重入母屋造であったが、解体修理により、桁行3間×梁間4間、8架椽(中国建築の垂木は母屋桁「架」ごとに別材とすることで屋弛みを造る。「架」の数で奥行規模をあらわす)、単層入母屋造に復原された。前面1間通りは吹放して格天井を張り、殿内は化粧屋根裏とする。入側柱は側柱より高く、円形断面の二重虹梁を架ける。側柱から入側柱に架けた円形断面の繫虹梁は、二手先の根肘木で支承する。正面側通りの頭貫も強い胴張りをもつ。組物は柱上に尾垂木3本を用いた四手先組物とする。最も上の尾垂木は前方に挺出しない。尾垂木先端に繰形をもつが、大仏様建築の木鼻や遊離尾垂木にみられる繰形とは一線を画する。中備は大斗を小さくするほかは同形式のものを中央間に2つ、脇間に1つ置く。台輪は用いない。大斗は斗尻の幅が円柱とほぼ同寸で、

隅は柱頭からおおきくはみ出る。斗尻は高く、皿斗状の造り出しをもち、含みは浅い。

傳熹年は華林寺大殿において尾垂木が入側柱上の通肘木に絡むように延ばされていることについて、入側柱が側柱と同高であれば、法隆寺金堂(斑鳩町、飛鳥)の構造形式と同じであり、仏光寺東大殿(山西省五台县、唐857年)よりも古い形式を残しているとみる。

(2) 元妙観三清殿(莆田市、北宋1015年)

元妙観は宋代の興化軍城寧夏門の外に位置する道観である¹⁵⁾(図15・16)。唐・貞観2年(628)に創建されたという。北宋・大中祥符年間に天慶観の勅額を賜り、元・元貞元年(1295)に玄妙観と名を改め、清代の康熙帝の即位(1662年)以降、皇帝の諱を避け、元妙観と称するようになった。三清殿は、明・崇禎13年(1640)の棟木の墨書銘に「北宋・大中祥符8年(1015)重修」と記され、この時代の再建と知られる。

現在は桁行7間×梁間6間であるが、明代の重修に際して、両側面を改造し、前面2間と背面1間を増築している。桁行5間×梁間3間、8架椽、単層入母屋造とする当初復原案が陳文忠により提示されている。以下、この復原案を紹介する。

当初の架構は檼梁式で、側柱より高い入側柱に円形断面の二重虹梁を架け、側柱から入側柱に架けた繫虹梁は二手先の根肘木で支承する。また円梁の下端には錫杖彫を施す。組物は柱上・中備とも、尾垂木2本、擬似尾垂木1本を用いる四手先組物で、側通りでは三斗と通肘木の組合せを2段重ねる。尾垂木の内部への引き込みは華林寺大殿に似ており、先端は細く削ぐように造り出す。大斗は斗尻の幅が柱径より大きく、皿斗状の造り出しを

表1 福建省の木造および石造の殿堂(元代以前)

名称	所在地	国	年号	西暦	主構造	屋根形式	桁行	規模 梁間	架椽	胴張り 横架材	皿斗	挿肘木	尾垂木先 繰形	詰組	台輪	遊離 尾垂木	隅 垂木	鼻隠板
華林寺大殿	福州市	呉越	銭弘俶18	964	木造	入母屋造	3	4	4	○	○	根肘木	○※1	○	×	×	○	○
元妙観三清殿	莆田市	北宋	大中祥符8	1015	木造	入母屋造	7	6	8	○	○	根肘木	○※2	○	×	×	○	—
陳太尉宮正殿 (当初部分)	羅源県	北宋			木造	—	3	5	—	○	○	×	—	○	×	×	—	—
甘露庵蟹閣	泰寧県	南宋	紹興16	1146	木造	入母屋造	3	2	6	○	×	○	—	○	×	×	○	○
同 観音閣	泰寧県	南宋	紹興23	1153	木造	入母屋造	方1間 裳階付		6	○	×	○	—	○	×	×	○	○
同 南安閣	泰寧県	南宋	乾道元	1165	木造	入母屋造	方1間 裳階付		6	○	×	○	—	○	×	×	○	○
同 上殿	泰寧県	南宋	開禧年間	1207以前	木造	入母屋造	方1間 裳階付		6	○	×	○	—	○	×	×	○	○
同 庫房	泰寧県	南宋	宝慶3以前	1227以前	木造	切妻造	2	2	2	×	×	○	—	×	×	×	—	○
宝山寺大殿	順昌県	元	至正23	1363	石造	切妻造	5	5	9	○	×	○	—	×	×	×	—	—
弥陀岩石室	泉州市	元	至正24	1364	石造	入母屋造	—	—	—	○	○	×	○	○	×	×	○	—

※1 反りこきの強い尾垂木に、山の小さな繰形をつける。 ※2 反りこきのある尾垂木が丸みを帯びたような形状を持つ。

もち、含みは浅い。

(3) 陳太尉宮大殿（羅源県、北宋代）

福州市の北に位置する羅源の遺構である¹⁶⁾（図17・18）。唐・乾符3年（876）に河南より閩（福建）に入り、羅源において住民に農桑を教えた陳蘇（831-915）を祀る祠として建てられた。間口3間で、奥行方向は2段に分かれ、前殿3間に後殿2間で、間に1間の取り合い部分を挟む。前殿は桁行1間×梁間2間の身舎の三面に廂が取付く構成で、身舎が最も古い様式を残し、北宋代の遺構と考えられている。前殿の廂および後殿部分は、一部に古材を用いているものの後世の改築、増築を受けている。

前殿身舎は架構が檼梁式で、軸部は胴張りのある同高の柱を、胴張りのある虹梁状の頭貫で繋ぐ。組物は柱上を尾垂木付の三手先、中備を出三斗とし3段重ねる。間口は6.1m（約20尺）を測る。柱頂径よりも大きな大斗と卷斗よりも大きな方斗をもち、尾垂木先端上面には独特の線形を施す。

(4) 甘露寺（泰寧県、南宋1146年～）

甘露寺（甘露庵）については、1961年に焼失した曇閣、観音閣、南安閣、上殿、庫房の構造と意匠を張歩騫の報告に基づき整理したい¹⁷⁾。

曇閣は、南宋紹興16年（1146）、甘露寺の大雄宝殿として建立された（図19・20）。洞穴の西側に坐してほぼ東面し、桁行3間×梁間2間の身舎の正面に廂が付く。屋根は入母屋造草泥葺きで、内部は化粧屋根裏とする。

棟通りにも柱を立て、直接棟を受ける。母屋桁は三手先の持ち送りで支えられるが、このうち下の二手は挿肘木として側柱に挿す。繫梁の上に花卉状の断面をもつ「瓜楞柱」式の束柱を建てる。

観音閣は曇閣の前面北方に南面して建っていた（図19）。棟木の墨書銘より紹興23年（1153）の建立と知られる。方1間裳階付、入母屋造草泥葺きで、内部を化粧屋根裏とする（後述する南安閣および上殿と同じ）。挿肘木の腰組が床を受ける。妻面の貫の上には束柱を立て中備を組む。主屋の軒は四手先の組物で支え、これには秤肘木を用いるが、内側に持送りはない。柱上・中備とも二手の根肘木が通肘木を受ける。また側柱と入側柱の間の繫梁は胴張りがあり、大斗は蓮弁を造り出す装飾的なものである。

南安閣は曇閣の前面南方に北面して建っていた（図19・20）。貫下面の墨書銘より乾道元年（1165）の建立と知られる。方1間裳階付、入母屋造草泥葺き、化粧屋根裏で、腰組をもつ。中備は観音閣と同様、貫上に束柱を立てて組む。主屋の軒は二手の根肘木を用いた三手先の組物で支える。内側の持送りは秤肘木がない。

上殿は曇閣の背面の岩壁上に建つ（図19・20）。いわゆる三聖殿。建築年代を示す墨書などはなかったが、壁面に記される詩のうち、最古のものが南宋開禧年間（1205～1207）の作であり、それ以前の建立とみられる。方1間裳階付き、入母屋造草泥葺き、化粧屋根裏で、柱上および中備に三手先組物を用いる。



図13 華林寺大殿（2010鈴木）



図14 華林寺大殿架構（2010鈴木）



図15 元妙觀三清殿（2010鈴木）



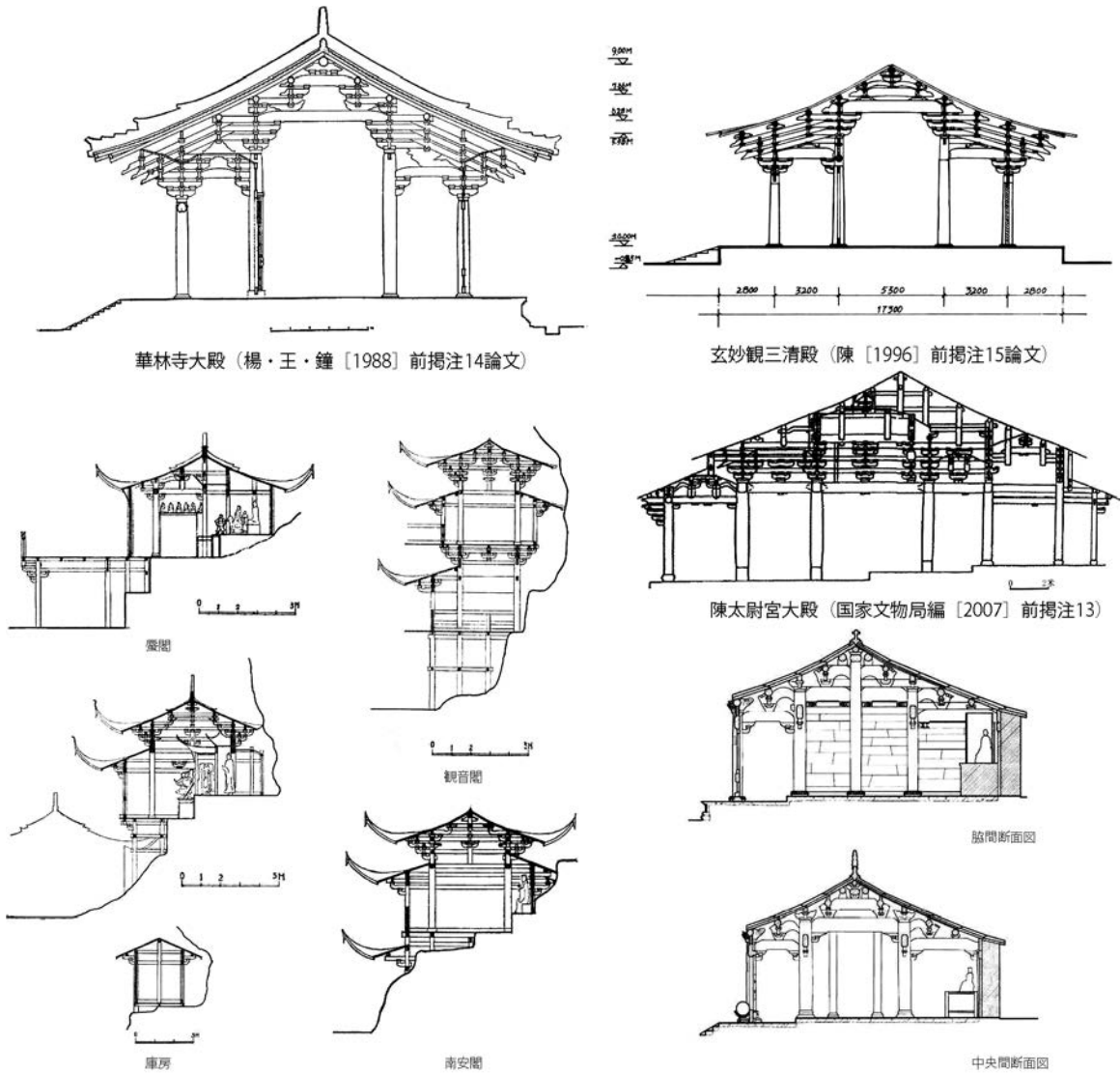
図16 元妙觀三清殿架構（2010鈴木）



図17 陳太尉宮山門（正殿は奥に位置する。2010鈴木）



図18 陳太尉宮大殿背面（2010鈴木）



華林寺大殿（楊・王・鐘 [1988] 前掲注14論文）

玄妙觀三清殿（陳 [1996] 前掲注15論文）

陳太尉宮大殿（國家文物局編 [2007] 前掲注13）

甘露庵（張 [1982] 前掲注5論文）

寶山寺大殿（樓・王 [2009] 前掲注18論文）

甘露庵（張 [1982] 前掲注5論文）

寶山寺大殿（樓・王 [2009] 前掲注18論文）

図19 福建省木造建築（元代以前）の梁行断面比較

庫房は南安閣背面の岩壁上に建っていた(図19・20)。背面の岩壁に記される詩により、宝慶3年(1227)以前の建立と知られる。方2間の切妻造草泥葺の極めて簡素な建物。母屋桁は柱で直接受け、丸桁は二手の根肘木で持送る。

(5) 宝山寺大殿(南平市、元1363年)

南平市大干鎮土壟村の宝山山頂に境内を構える宝山寺の石造殿堂である¹⁸⁾(図21・22)。軸部や組物、垂木に至るまで木造を模し、瓦も石造で模す。棟下面の銘により元・至正23年(1363)の建立と推定されている。明・弘治12年(1499)に修理がなされ、脇間の母屋桁(石桁)も差し替えられた。正徳15年(1520)に廃寺になったとみられるが、万暦42年(1614)には再興された。

桁行5間×梁間5間、9架椽、切妻造で、1間の身舎の前後に廂が付き、さらに全面に吹放ちの孫廂がつく¹⁹⁾。梁行方向の架構に擡梁式と穿斗式を併用する。中央間の両脇の柱通りが抬梁式、脇間の外側の柱通が穿斗式である。中央間に入側柱を虹梁状に造り出した頭貫で繋ぎ、その上に梁を重ね斗を据えることで棟を受けるのに対し、脇間は棟通りに柱を立て、柱上の大斗で棟を支持し、入側柱の虹梁状の頭貫は柱に挿す。入側柱と梁上の繋ぎに海老虹梁状の造り出しをもつ石材を重ねている。桁行方向は側柱通りに飛貫を挿し、中央間の梁行方向の頭貫と桁行方向の飛貫は実肘木を用いた根肘木の持

送りをつける。

孫廂と廂の間の柱通りは柱上に大斗肘木を据える。中央間を構成する入側柱4本は礎盤を造り出した礎石に据えられ、他の柱より太く著しい胴張りをもち。また大斗は大きく、斗尻が柱頭面よりはみだし、成も高いが、含みは浅い。これらの特徴は華林寺および陳太尉宮に通じるもので、古い様式を伝えている。

(6) 弥陀岩石室(泉州市、元1364年)

泉州北の岩山に位置する石室で、堂内に阿弥陀立像を安置する²⁰⁾(図23)。碑文より、元・至正24年(1364)の建立と知られる。宝山寺大殿と同様、木造の軸部・組物・屋根を石造で模している。間口約5.5mで、奥行方向は背面が崖にかかるように造られ、意匠も簡略化されている。正面は丸柱、飛貫、膨らみのある頭貫をあらわすが、側面は貫を表現していない。組物は二手先で、壁付三斗を造り出し、一手目に通肘木を通す。大斗は皿斗形の繰形がつく。柱頭の大斗は柱頭よりはみ出すが、中備の大斗は小さくしている。隅の肘木は開元寺の塔と同じく隅行以外は壁に直行するようにし、かつここではその下にも大斗を据え、形式的には中備組物と同じにしている。二手目の上の拳鼻は下端を水平にしたもので、上面に繰形をもち、後述の万寿塔、釈迦文仏塔、開元寺双塔、六勝塔に通じる。また扁平な垂木による扇垂木を用いる点は開元寺の塔および宝山寺大殿と共通する。

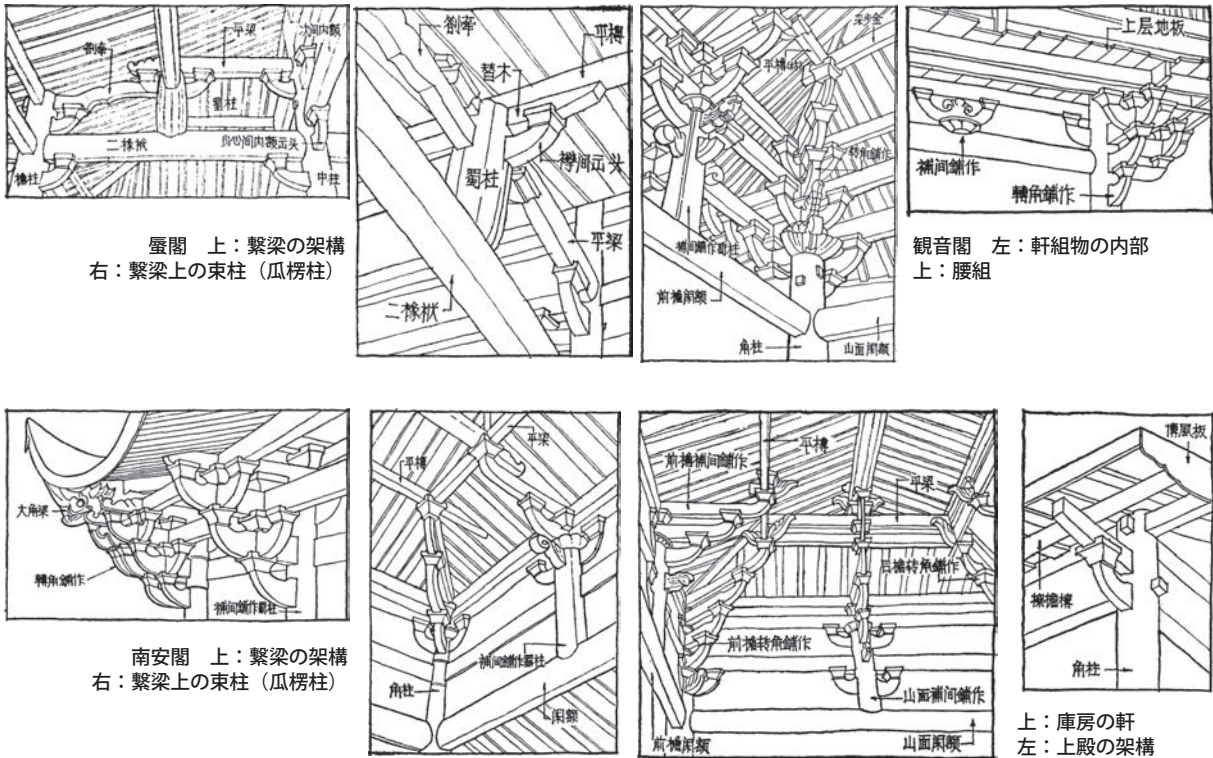


図20 甘露寺諸殿の細部意匠(張[1982]前掲注5論文)

2-3 石・磚・陶造塔

続いて元代以前に建てられた石造・磚造・陶造の塔のなかから、木造を模した意匠をもつ塔を14件取りあげる(表2)。

(1) 保聖崇妙堅牢塔(福州市、後晋941年)

福州烏石山の東麓に建つ八角七層の石塔である。烏塔とも称する。丸柱の上に頭貫あるいは台輪を模した材を廻す。初層のみ柱に金剛像を彫る。軒は各層とも4段の持送りからなり、下の2段は角型、上の2段は弧状とする。関口欣也は、後述する崇福寺応庚塔との比較から、積上式組物の表現が簡略化されたものと解釈している²¹⁾(図24)。

(2) 吉祥塔(古田県、北宋979年)

古田県新城鎮に位置する八角九層の石塔である²²⁾(図25)。清代編纂の『古田県志』²²⁾によれば、北宋・太平興国4年(979)に建てられ、元・大徳年間(1297-1307)および明・成化年間(1465-1487)、さらに中華民国24年(1935)にも重修された。もとは古田の旧城に位置する吉祥寺前にあったが、1959年のダム建設にともない現地に移築された。高さは約25mで、通減率が比較的大きい。各層とも軒は浅く、弧状に1段持ち送るのみ。初層のみ柱位置に武士を彫るが、二層以上は柱を造り出し、このうち二層のみ柱上の大斗の上に虹梁を架け、1段の根肘木で支える。三層以上は梁を表現せず、大斗の上に弧状の持送りがくるが、2段の根肘木が表現されている。柱は丸柱ではなく、八角平面の角を立たせた角柱で表現している。ただこれらいずれの表現も重修時のものである可能性がある。

(3) 報恩寺塔(莆田市、北宋990年)

莆田の東北、烏石山に位置する八角三層の石塔である(図26)。明代編纂の『八閩通志』²³⁾によれば、北宋・淳化元年(990)に東岩寺の塔として建てられた。一辺4.4m、塔身の高さは約13mである。木造表現は極めて簡略化しており、各層とも軸部の表現はないが、軒は3段の弧状の持送りで挺出する。段数は異なるがその方法は保聖堅牢塔・吉祥塔と共通しており同時代の手法として普遍的な手法であることがわかる。

(4) 千仏陶塔(福州市、北宋1082年)

福州東郊に所在する鼓山涌泉寺の天王殿前に建つ2基の陶塔である²⁴⁾(図27)。南台島の龍瑞寺にあったものを、1972年、現地に移した。2基は同一の形式をもつ八角九層塔で、高さは6.83mである。各層の高欄には腰屋根がつき、リズムカルで美しい。各層の隅柱は胴張りもち、頭貫で繋がれる。組物は初層のみ五手先で、壁付から3手目までにそれぞれ三斗を組み、3・4手目で尾垂木を

持ち出す。大斗は大きく柱よりはみ出す。わずかに皿斗状の造り出しをもつ。中備には大斗の代わりに墓股を置く。尾垂木の先端は直線状で線彫はない。なお、壁面を埋め尽くすように千仏を造り出す。垂木は飛檐垂木分のみ表現し、軒支輪には網目状に線刻を施す。屋根は本瓦葺を表現している。関口は積上げ式の組物を明確に表現することが確認できる事例であり、中備に墓股を用いるのは遼代に多く、古い形式を反映したものと位置付ける。

(5) 三峰寺塔(長樂市、北宋1117年)

長樂市吳航鎮に位置する八角七層の石塔である(図28)。正式名称を聖寿宝塔といい、七層の刻銘から政和7年(1117)に建てられたことが知られる。初層は柱位



図21 宝山寺大殿(2010鈴木)



図22 宝山寺大殿架構(2010鈴木)



上:組物
左:正側面

図23 弥陀岩石室(1991奈文研)

置に八角形の大斗、その上に桁を表現し、3つの弧状の持ち送りで軒をつくる。二層から七層は隅部に瓜楞柱を造り出す。大斗は方形で柱に対して大きく、皿斗状の線形を持つ。柱頭の組物は尾垂木1本を用いた二手先とする。軒は初層と同様3段であるが、中段のみ角型断面とし、これが一手目の肘木で支えられる通し肘木にあたる。尾垂木は先細りの直線状で線方を持たない。瓜楞柱は保国寺大殿（浙江省寧波市・北宋1013）にみられる古式の短柱である。

(6) 龍山祝聖宝塔（福清市、北宋1119年）

福清市に位置する八角七層塔である（図29）。水南塔とも称する。北宋・宣和元年（1119）に建てられたものが、建炎3年（1129）の台風で破壊され、南宋・紹興11年（1141）に修復されたという。4層までが北宋、5層から7層は南宋の遺構とみられている。隅部には瓜楞柱を用いる。大斗は方形で柱に対して大きく、皿斗状の線形を持つ。柱頭の組物は尾垂木1本を用いた蓋手先で、軒は3段造り出すが、2層以上は中段のみ角型断面として通し肘木を表現する。これらの点は前述した三峰寺塔と共通する構成である。しかし中備位置の肘木は見られず、尾垂木の先端には線形がつく。また各層の大斗間には桁を表現するが、表面には仏像が刻まれている。

(7) 崇福寺応庚塔（泉州市、北宋）

泉州市の崇福寺に建つ八角七層の石塔である²⁵⁾（図30）。各層隅に瓜楞柱を造り出し、皿斗状の線形をもつ大斗をのせ、二手先組物で軒を支える。軒は弧状の持ち送りで表現する。柱は低減して上端部が小さく、壁面には頭貫・地覆・方立・窓台・連子を表現し、頭貫の上には長辺を上にした台形の中備を2つ据え、通し肘木を受け

る。二層より上には格狭間付きの高欄を巡らす。屋根は扁平な垂木と本瓦葺を表現する。頂部に相輪をのせる。

(8) 万寿塔（石獅市、南宋1131-1162年）

石獅市の石造八角五層塔である（図31）。姑嫂塔と俗称し、関鎖塔ともいう。南宋の紹興年間（1131～1162）に僧・介殊により建てられた。高さは22.86mで、初層のみ裳階が取り付け広い平面になっている。塔の西面には石造の亭が隣接して建つ。

塔の角隅には瓜楞柱を造り出し、皿斗状の線形をもつ大きな大斗を載せる。軒は弧状の持送を重ねる形式で、初層のみ1段、二層以上は2段重ねる。

塔前の亭は桁行3間×梁間2間の寄棟造で、面取りを施した角柱上にやはり皿斗状の線形を施した大斗を載せる。側柱筋は大斗上に桁を架ける。入側には側柱よりも高い柱を用い、その間に繫梁を渡す。隅柱の大斗上には尾垂木・隅木を載せる。桁および繫梁の木鼻、隅の尾垂木先端には、線形を施す。木鼻に線形がつく最古の事例である。大仏様建築ではこの手法を多用しており、その系譜を考える上で重要な資料と言えよう。

(9) 安平橋白塔（晋江市、南宋1131-1162年）

南宋・紹興年間（1131-1162）に造営された安平橋の橋詰に建つ六角五層磚塔（図32）。明の万曆34年（1606）、清の康熙58年（1719）、嘉慶12年（1807）に重修されている。高さは22.5mで外壁には白灰を塗る。各層隅に円柱を造り出すが、頭貫あるいは台輪を模した造り出しはない。その上に組物を置き、3段の通し肘木を支えるようにみせる。柱上は壁付方向と隅行き方向に肘木を造るほか、その間に通肘木の端部を模した造出しももつが、その角度は本来より振れており、隅行き方向と壁付方向の

表2 元代以前の福建省の塔建築

名称	所在地	国	年号	西暦	主構造	柱の断面形	胴張り横架材	皿斗	挿肘木	尾垂木先線形	詰組	台輪	遊離尾垂木
保聖崇妙堅牢塔	福州市	後晋	天福6	941	石造 八角七層塔	丸柱	×	—	—	—	—	△	×
吉祥塔	古田県	北宋	太平興国4	979	石造 八角九層塔	八角柱	×	—	根肘木	—	—	×	×
報恩寺塔	莆田市	北宋	淳化元	990	石造 八角三層塔	—	×	—	—	—	—	×	×
千仏陶塔	福州市	北宋	元豊5	1082	陶造 八角九層塔	丸柱	×	△	×	×	○	×	×
三峰寺塔	長楽市	北宋	政和7	1117	石造 八角七層塔	瓜楞柱	×	○	×	×	△	×	×
龍山祝聖宝塔(水南塔)	福清市	北宋	宣和元	1119	石造 八角七層塔	瓜楞柱	×	○	×	○	×	×	×
崇福寺応庚塔	泉州市	北宋			石造 八角七層塔	瓜楞柱	×	○	×	○	△	×	×
万寿塔(姑嫂塔)	石獅市	南宋	紹興年間	1131-62	石造 八角五層塔	瓜楞柱	×	○	×	○	—	×	×
安平橋白塔	晋江県	南宋	紹興年間	1131-62	磚造 六角五層塔	角柱	×	—	—	○	○	△	×
釈迦文仏塔	莆田市	南宋	乾道元	1165	石造 八角五層塔	瓜楞柱	×	○	×	○	○	×	×
幽岩寺塔	古田県	南宋	嘉泰4年	1204	石造 八角九層塔								
開元寺仁寿塔	泉州市	南宋	嘉熙元	1237	石造 八角五層塔	丸柱	○	○	×	○	○	×	×
開元寺鎮国塔	泉州市	南宋	淳祐10	1250	石造 八角五層塔	丸柱	○	○	×	○	○	×	×
六勝塔	石獅市	元	至元22	1285	石造 八角五層塔	丸柱	○	×	×	○	○	×	×



初層

図24 保聖崇妙堅牢塔
(2007にんぶろ)



図26 報恩寺塔 (2007にんぶろ)



図27 千仏陶塔 (2007にんぶろ)
左：二層、右：全景



九層



三層



二層



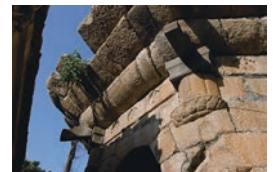
初層

図25 吉祥塔 (2007にんぶろ)

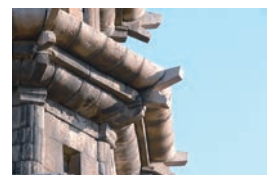


二層

図28 三峰山寺右 (1991奈文研)



六層



四層



初層

図29 龍山祝聖宝塔 (2007にんぶろ)

間に渡したものと考えられる。4層までは中備え位置に尾垂木1本の二手先組物を置く。5層のみ中備位置に組物を置かない。

(10) 釈迦文仏塔（莆田市、南宋1165年以前）

莆田市城南鳳凰山麓に位置する広化寺の東側に建つ八角五重の石塔である²⁶⁾ (図33・36)。南宋・乾道元年(1165)にはすでに建てられていたという。各層隅部に瓜楞柱を造り出し、皿斗状の繰形をもつ大斗を載せる。壁面には飛貫・地覆・方立・窓台などを表現する。大斗の間には通肘木あるいは頭貫を表現し、その上に二手先組物を据える。一手目・二手目ともに通肘木を渡している。柱間中央にも1つずつ組物を据えるが、大斗は表現せず、通肘木あるいは頭貫の上に一段目の肘木がのるようにみせる。なお卷斗も大斗と同様、皿斗状の繰形をもつ。二手目が支える隅の尾垂木は繰形をもち、中備位置では繰形をもつ木鼻をうける。垂木は表現されていないが、本瓦葺の屋根は造出されている。

(11) 幽岩寺塔（古田県、南宋1204年）

古田県に建つ八角九層の石塔である。北宋・元豊3年(1080)に創建され、南宋・慶元6年(1200)に壊された後、嘉泰4年(1204)に重修された。木造を模した意匠を有するようだが、筆者は未見であり、詳しい報告も知らない。今後の課題としたい。

(12) 開元寺仁寿塔（泉州市、南宋1237年）

泉州開元寺双塔の西塔である²⁷⁾。開元寺は唐・垂拱2年(686年)に創建され、開元26年(738)に現在の寺号に改められた。広大な伽藍の中樞に明・建文2年(1400)の戒壇、明・崇禎10年(1637)の大雄宝殿などが軒を連ね、南方東西に八角五層の石塔を配する。双塔の木造表現の精巧さは、後述する六勝寺とともに、他の類例に比して突出している。建立年代に10年の差があり、構造形式や様式に若干の違いがみられる。

西塔は仁寿塔ともいい、後梁・貞明2年(916)に七重の木造塔として建立され、後に磚塔に改められた。南

宋・紹興25年(1155)に罹災し、紹定元年(1228)に石造塔に改装され着工し、嘉熙元年(1237)に竣工した(図34・36)。石造の八角五層塔で高さは44.06mを測る。隅柱は丸柱で、頭貫、飛貫(初層・二層)、腰貫、方立、窓台などの軸部を表現する。頭貫を胴張りのある虹梁状に造り、端部を垂直の木鼻とするところは、華林寺大殿前面の頭貫などに通じる。また、頭貫は繰形のある持送りで支える。柱上および中備に尾垂木付の二手先組物を据え、丸桁を受ける。壁付には枳肘木と通肘木を表現するが、手先上には秤肘木を組まない。隅柱上では隅行方向と壁面に垂直な方向の3方に手先を挺出するが、両脇のものは大斗からはみだしたような窮屈な納まりになっている。大斗と卷斗はいずれも皿斗状の繰形をもち、隅行の尾垂木先端上端に繰形を施す。中備は初層および二層は2組、三層以上は1組とする。中備の2手目は繰形をもつ水平の木鼻を受ける。また大斗は柱上に比較して小さくする。屋根は隅扇垂木で、扁平な垂木、本瓦葺を表現する。内部は塔身に廊を廻らす形式で、初層～四層では八角の隅行方向の繫梁を二手先の根肘木で支承する。虹梁上にはやや塔身よりに大瓶束を立て、上部の床梁を受ける。

(13) 開元寺鎮国塔（泉州市、南宋1250年）

開元寺の東塔は鎮国塔ともいい、唐の咸通6年(865)に五重の木造塔として建てられた。後に磚造に改められ、西塔同様、南宋・紹興25年に罹災し、嘉熙2年(1238)に石造塔に改められ、淳祐10年(1250)に竣工した(図35・36)。高さ48.24mを測る。基本的な構造・様式は西塔(仁寿塔)と同じであり、相違点のみ取りあげたい。まず組物一手目に通肘木を通すことがあげられる。ついで一手目卷斗の前面に木鼻形の持送りをつける。また、中備組物は太斗ではなく木鼻形の持送りをを用いる。この持送りは隅柱脇の手先にも用いられる。そして、中備組物は初層から五層までいずれも2組置く。このため組物間の距離が狭くなるが、四・五層の壁付肘木を連肘木と



図30 崇福寺応庚塔 (1991奈文研)



図31 万寿塔 左：全景 右：前亭組物 (1991奈文研)



図32 安平橋白塔 (1991奈文研)



図33 釈迦文仏塔 (2007にんぶろ)



三層



初層

図34 開元寺仁寿塔 (2010鈴木)



三層

図35 開元寺鎮国塔 (2007にんぶろ・2010鈴木)

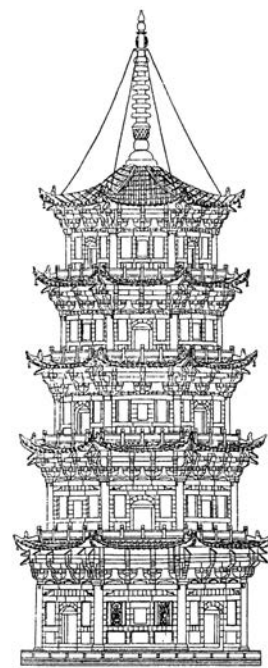


広化寺釈迦文仏塔
(吳 [1997] 前掲注27論文)



開元寺鎮国塔

(張・董・葉 [1989] 前掲注28論文)



開元寺仁寿塔

図36 塔の立面比較

し、隣り合う肘木と卷斗を共有することで、窮屈さをやわらげている。

(14) 六勝塔（石獅市、元1285年）

石獅市に建つ石塔²⁸⁾（図37）である。日湖塔・石湖塔ともいう²⁹⁾。北宋・政和3年（1113）年に創建されたが、南宋・景炎2年（1277）、元軍により大半が壊された。後、元・至元2年（1342）に重修されている。1984年に屋根が修理された。八角五層で、高さ36.06mを測る。隅部に円柱を造り出し、胴張りをもち頭貫・飛貫・方立・窓台などを表現し、中備は各層とも2組の組物を据える詰組とする。いずれも二手先組物を置き、1段目には通肘木を通す。隅柱上の肘木のうち、両脇のものは、中備組物と同様の扱いを受ける。二手目は隅のみ尾垂木、それ以外では線形をもつ木鼻を受ける。これら基本的な構造・意匠は開元寺鎮国塔と非常によく似ている。相違点としては、1段目の卷斗の前面に拳鼻状の持送が付かないこと、柱上の大斗を円形大斗とし、蓮弁文様が彫刻されること、中備組物に大斗を用いることが挙げられる。円形大斗を除けば、開元寺仁寿塔にみられる意匠である。

2-4 福建古建築の構造と意匠

以上みてきた福建省古建築の特徴を整理し、その歴史の変遷について考察を加えてみよう。

(1) 瓜楞柱

瓜楞柱とは花弁状の断面をもつ柱のことである。福建省では、三峰寺塔を初例として龍山祝聖宝塔、崇福寺庾塔、甘露寺鬘閣（東のみ）、万寿塔、釈迦文仏塔でこの形式を用いる。12世紀の限られた時期に流行した形式と位置付けられるであろう。他の地域に目を移すと、保国寺大殿（浙江省寧波市・北宋1013年）がこの形式を用いている最古の遺構と考えられる。中世日本の仏教建築には導入されていない。



図37 六勝塔（1991奈文研）

(2) 胴張りをもち横架材

華林寺大殿から宝山寺大殿までいずれの建物でも、胴張りをもち虹梁あるいは頭貫を用いている。塔では表現の難しさから表現する例が少ないが、開元寺双塔と六勝塔では、頭貫の胴張を見事に映し出している。宋・元代の福建省においては、一般的な技法であったといえる。

(3) 挿肘木

すでに指摘されるとおり、最も顕著な挿肘木の使用事例は焼失した甘露寺の諸建築である。このほか根肘木による梁および貫の支承は、華林寺大殿、吉祥塔、元妙観三清殿、宝山寺大殿にも認められ、北宋から元代まで用いられた技法であることを確認できた。

ただ甘露寺の諸建築についても、関口が指摘するとおり、南安閣、観音閣、上殿では、軒を支える組物の一手目に秤肘木を用いている。いくぶん簡素な意匠をもつ鬘閣では秤肘木がみられず、浄土寺浄土堂や東大寺南大門の形式に近い。

(4) 大斗の形状と皿斗状線形

華林寺大殿、元妙観三清殿、陳太尉宮正殿など北宋の殿堂では、皿斗状線形を施す大斗を採用している。甘露寺の諸建築および宝山寺大殿にはみられないが、弥陀岩石室では用いている。塔婆では千仏陶塔、三峰寺塔、龍山祝聖宝塔、崇福寺庾塔、万寿塔、釈迦文仏塔、開元寺仁寿塔・鎮国塔で使用しているが、元代の六勝塔ではみられない。宋代では一般的であったが、元代に下って選択的になった可能性がある。

(5) 尾垂木および繫梁・桁の線形

三峰寺塔以前の塔・殿堂とも尾垂木先は直線状であるのに対して、龍山祝聖宝塔以降の建物はいずれも先端に双曲線を用いた線形をもつ。華林寺大殿の尾垂木にも線形があるが、龍山祝聖宝塔以降のものとは大きく異なる。管見の限り、福建省以外で同様の線形はみられない。福建では弥陀岩石室まで時代が下っても、同様の線形がみられる。特に万寿塔、釈迦文仏塔、開元寺仁寿塔、同鎮国塔、六勝寺では水平に挺出する材の木鼻の上面に線形を用いている。日本の浄土寺浄土堂（小野市、鎌倉1192年）など大仏様建築はいずれも遊離尾垂木以外の尾垂木を用いない。ただ、貫材の木鼻に同様の線形を施しており、福建の意匠を引用したことは明確である。つまり北宋末以降、福建省において用いられた意匠を日本で引用したものであり、木鼻における使用ということであれば、さらに時代を絞りこむことができるだろう。

(6) 台輪

石造塔の意匠で台輪か頭貫のどちらを表現したものか判然としないものはあるが、基本的に用いられていない。

(7) 遊離尾垂木

大仏様の特徴とされる中備の手法であるが、福建省の遺構では確かめられない。中国では山西省平遥県の文廟大成殿（金1163年）に類例を認めうるのみである。この点注目されるのはハノイの文廟のほとんどすべての建物に遊離尾垂木が用いられていることである。ベトナムの場合、宗教建築にとどまらず民間建築でも遊離尾垂木を採用しており、それは小屋組本体に用いる登り梁の省略形としてテコの役割を果たす軒の中間支持部材と考えられる³⁰。中国西南少数民族の民家建築を参照すると、福建を含む華南一帯の民家小屋組も、穿斗式構法が普及する以前は東南アジア的な登り梁を採用していたと考えられ、その伝統の中から遊離尾垂木が派生した可能性を想定すべきだろう。

(8) 隅扇垂木と鼻隠板

華林寺大殿をはじめとする殿堂はいずれも隅扇垂木で鼻隠板を用いる。塔についても、千仏宝塔、開元寺仁寿塔、同鎮国塔、六勝寺など、垂木を詳細に造り出しているものはいずれも隅扇垂木としている。鼻隠板はともなわれないが、石造や陶造による省略の可能性もあるだろう。

(9) 尾垂木の納まり

傳熹年は尾垂木を入側柱近くまで引きこむ華林寺大殿（元妙観三清殿も同様）は、仏光寺東大殿よりも古い形式であるとした（図37）。中国の尾垂木に関しては、清

水重敦も日本との比較から次の指摘をした³¹。唐招提寺金堂（奈良市、8世紀末）をはじめとする日本の古代建築では尾垂木を入側柱上まで引き込み尻手を尾垂木掛けに掛け、その上に東踏み置くのみで、仏光寺東大殿のように通肘木と絡め固める手法をとっていないことである。両者を考えあわせ、尾垂木の構造的な発展に限定するならば、法隆寺金堂→華林寺大殿→仏光寺東大殿という進化の構図が描けそうである。

しかしながら、尾垂木尻を入側柱筋で絡めることで押さえる手法は、通肘木ではなく四天柱上に組んだ土居桁ではあるものの、薬師寺東塔（奈良市、730年）にみられる。古代日本においても、尾垂木尻を固める手法とそうでない手法の両者が併存したと考えるのが妥当であろう。

一方、華林寺大殿でも中備位置の尾垂木の尻手に注目すると、母屋桁により押さえ、跳ね上がらないようにするのみで、何かに架ける納め方にしていない。これは中世日本の禅宗様の納め方に他ならない。今後、中国の他地域、古代・中世の日本の遺構について、さらなる検討が求められる。

3. おわりに

3-1 甘露寺と懸空寺

甘露寺は「南の懸空寺」とも称される。山西省渾源の

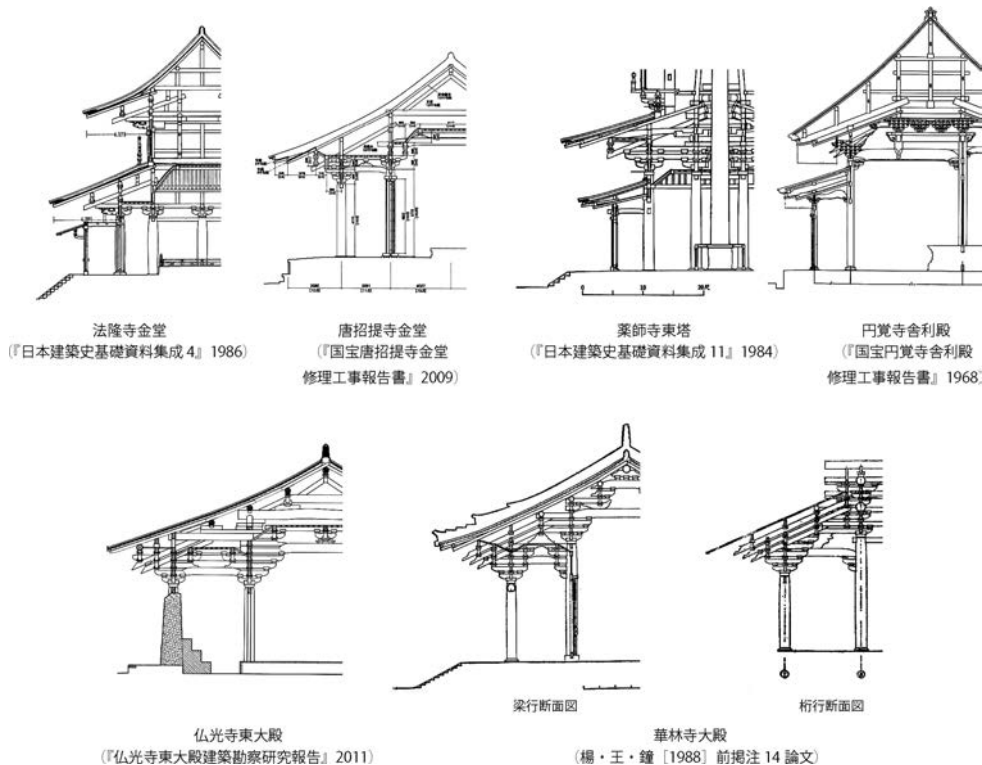


図38 日中古建築における尾垂木の納まり

懸空寺は北魏後期に創建され、清代の重修による懸造の寺院で、しばしば三仏寺投入堂との類似が目されてきた。しかし、懸空寺には岩陰も岩窟も存在しない。急峻な絶壁に横棒を串刺しにして堂宇・楼閣を支えている。わたしたちのこれまでの分類法³²⁾を用いる場合、C型 = 「絶壁・懸造複合型」の典型である。一方、甘露寺は大きな洞穴を構成する複数の岩陰・岩窟に懸造の建築群をまるごと納めている。いわば不動院岩屋堂と三仏寺投入堂が複合的に洞穴内におさまっているようなものであり、再びわたしたちの分類法を用いるならば、B-2b型 = 「岩窟内本堂型」もしくはB-2c型 = 「岩陰内本堂型」に含まれる。1960年代に再建された甘露寺ではあるけれども、焼失以前からB-2b型とB-2c型の複合形式であったのはあきらかであり、華南（中国）と山陰（日本）との親近性を否定できないであろう。現状では、華北の石窟寺院が六郷満山と近く、華南の洞穴懸造寺院が山陰と近い関係にあるということを繰り返し述べておきたい。

3-2 中世大仏様と福建建築

(1) 福建古建築の選択的移入

本論の後半では、福建省に所在する元代以前の古建築の構造・意匠を網羅的に概観した。新たな材料が増えた結果、これまで指摘されてきた中世日本の大仏様における選択的な福建建築要素の移入という評価を再認できたと考える。とくに尾垂木先端および通肘木・桁の先端の線形の使用時期を明確にできたことと、福建省で流行していた瓜楞柱を採用しなかったことの2点を明らかにして

きたのは大きな成果である。また、華北地域を中心とする同時代の建築にくらべ、各時代とも古風な形式をもつことも改めて指摘したい。福建省における最古の木造建築である華林寺は、それよりも古い華北地域の建築と比較して、古代日本建築との共通性が強い。皿斗状の線形、尾垂木の納め方にその傾向を読み取れる。また、同時に禅宗様との共通性も少なくない。

古代日本と中世日本の建築様式が、中国福建省で交錯するかのような構図を、これまで以上に明確に描きだせたと思われる。今後は本稿で確かめた構造・意匠の中国における位置づけを周辺地域、あるいは後世との比較により明確にしてゆきたい。

(2) 華林寺大殿と甘露寺

2012年の福建省調査（環境大学隊）では、泰寧からの帰途、福州で1泊し、華林寺大殿を調査した。浅川個人としては1991年以来2度目の訪問である。一度目は写真撮影のみにとどまったが、今回は本堂の平面図を実測した（図39）。大殿は、桁行3間×梁間4間の寄棟造で、日本流の間面記法で表現すれば「一間四面」となる。この場合、身舎は1間×2間と特異だが、その1間（中央間）は脇間にくらべてはるかに長い。前章で述べたように、円形断面の梁・通肘木・一軒隅扇垂木・鼻隠板・挿肘木・皿斗付卷斗など大仏様の要素が基調をなすが、組物・礎盤・四半敷などは禅宗様であり、小屋組は北方風の様式を継承している。福建省の古建築は、このように大仏様の要素を発露させながらも、禅宗様や華北建築の要素を複合させており、大仏様のモデルとなった寺院は福建省に存在しないと考えられている。

ここでもう一度甘露寺の伝承に立ち戻りたい。甘露寺は、東大寺の鎌倉再建に係わる日本人が視察にきたという寺伝を有する。とくに基台を支える1本柱（状元柱）の柱頭組物が挿肘木の源流だと伝承されているが、少なくとも現状では大仏様の要素は希薄であり、焼失前の殿堂にみられる細部様式も秤肘木の有無などから関口欣也（前掲注5）は「日本の大仏様と直結するものではない」と切って捨てている。

その意見をいったん受け入れるとして、中国南方最古の木造建築とされる華林寺大殿は日本の中世大仏様に影響を与えた可能性はあるだろうか。重源の訪中年代に華林寺が福州に存在したのは間違いなく、「日本人が視察した」可能性がないとは言えない。しかし、常識的に考えて、3間×4間程度の仏堂を大仏殿の参考にしたとは思えない。細部の類似性はさておき、世界最大の木造仏堂再建にあたって、華林寺大殿が参照の候補となった可能性は高くはないであろう。日本人が視察したとすれ

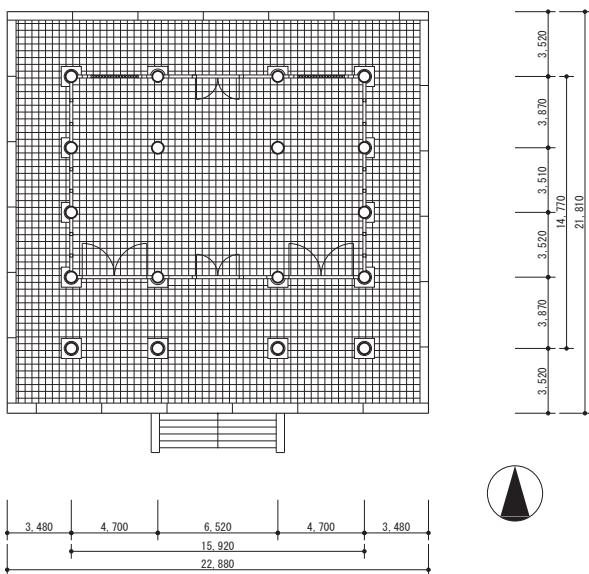


図39 華林寺大殿平面図（実測：清水拓生、作図：中島俊博）

ば、もっと大きな仏堂やアクロバティックな大型の懸造を参照した可能性を想定しなければならない。その点、1本柱で大基台を支える甘露寺の構造は、巨大建築を構想する者にとって魅力的な素材であったかもしれない。以上の推測にはなんの根拠もない。否、甘露寺に残るまことしやかな（荒唐無稽な？）寺伝以外の証拠はない。しかし、その珍しい伝承を完全に葬り去るのは、焼失前の状元柱の資料をみてからでも遅くないと思われる。

【附記】 本稿は科学研究費基盤研究(C)「中世日本と東アジアの木造建築における架構システムに関する比較研究」(課題番号:24560797、代表者鈴木智大)および同22560650「石窟寺院への憧憬－岩窟／絶壁型仏堂の類型と源流に関する比較研究－」(代表者:浅川滋男)による研究成果の一部である。「1 福建丹霞と甘露寺」を浅川・中島、「2 福建の小建築－その構造と意匠」を鈴木が分担執筆し、「3 おわりに」は全員で共同執筆した。なお、1は2012年8月31日～9月5日におこなった福建省調査(環境大学隊)の成果報告であり、調査を補助していただいた眞田廣幸・清水拓生・斉藤一步の3氏に深く感謝したい。また、3の考察のうち「ベトナム文廟の遊離尾垂木」に係わる部分は浅川の持論(参照 Web サイト2・3)を記したものである。

注

- 1) 浅川滋男・中島俊博・清水拓生・仲佐望(2012)「山のジオパークにむけて－摩尼山と摩尼寺『奥の院』遺跡－」山陰海岸ジオパーク国際学術会議「湯村会議」ポスターセッション論文アブストラクト: pp.93-94
- 2) 中島俊博・浅川滋男(2014)「山のジオパークにむけて－摩尼山を中核とする景勝地トライアングルの構想－」『鳥取環境大学紀要』第12号、pp.119-136
- 3) 浅川滋男編(2013)『聖なる巖－窟の建築化をめぐる比較研究－』平成22～24年度科学研究費・平成24年度鳥取環境大学学内特別研究費報告書(全124p)、鳥取環境大学
- 4) 浅川滋男編(2011)『大山・隠岐・三徳山－山岳信仰と文化的景観－』鳥取環境大学建築・環境デザイン学科&鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室(全112p)
- 5) 福建省文物管理委員会(1959)「泰寧甘露岩宋代建築和墨跡」(『文物』1959年第10期、pp.79-82)、張步騫(1982)「甘露庵」(建築理論及歴史研究室編『建築歴史研究 第二輯』中国建築科学研究院建築情報研究所、関口欣也(2005)「福建と大仏様異聞」(『文建協通信』79、後に『関口欣也著作集 二 江南禅院の源流、高麗の発展』中央公論美術出版、2012に収録)。
- 6) 以下の甘露寺に係わる伝承については、おもに『百度百科』甘露寺の項(Webサイト1)を参照した。
- 7) グスタフ・エックは福建省の塔を考える上で日本の「天竺様」建築が参考になると指摘した。Gustav Ecke, (1936) 'Structural Features of the Stone-Built T'ing-Pagoda', *Monumenta Serica Journal of Oriental Studies of the Catholic University of Peking* vol.1, Henri Vetch.
- 8) 田中淡(1976)「中世新様式における構造の改革に関する史的考察」(『太田博太郎博士還暦記念論文集 日本建築の特質』中央公論美術出版、1976。後に「日本中世新様式における構造の改革」と改題して『中国建築史の研究』(弘文堂、1989)に収録)。大仏様に関しては、田中淡(1975)「重源と大仏殿再建」(『月刊文化財』1975年7月号)、同(1976)「重源の造営活動」(『仏教芸術』105)で詳述している。
- 9) 傅熹年(1981)「福建的幾座宋代建築及其与日本鎌倉『大仏様』建築的關係」(『建築学報』1981-4。後に『傅熹年建築史論文集』文物出版社、1998年に収録)。
- 10) 「大仏様の源流を求めて」(『建築雑誌』1999年2月号)。
- 11) 関口欣也(2005)前掲注5論文。
- 12) 以下の3つの調査である。1991年度、浅川が奈良文化財研究所において主導した芸術文化振興基金による調査(以下、「1991奈文研」と略称)。2007年、鈴木が参加した科学研究費特定領域研究「杭州湾岸地域における都市・建築・歴史の構造」(課題番号:17083008、代表者:藤井恵介)による調査(以下、「2007にんぷろ」と略称)。2010年、鈴木が代表を務めた科学研究費基盤研究(C)「中世日本と中国における木造建築の架構システムに関する比較研究」(課題番号24560797)による調査(以下、「2010鈴木」と略称)。挿図写真の注記はこれらに対応する。
- 13) この時代の中国福建建築の総論については、以下を参考にした。田中淡(1998)「五代・北宋・遼・金の建築」(『世界美術大全集 東洋編 第5巻 五代・北宋・遼・西夏』小学館)。田中淡(2000)「南宋・金の建築」(『世界美術大全集 東洋編 第6巻 南宋・金』小学館)。国家文物局編(2007)『中国文物地図集 福建分冊(上・下)』福建省地図出版社。

- 14) 華林寺大殿については、林釗（1956）「福州華林寺大雄宝殿調査簡報」（『文物参考資料』1956年3期：pp.45-48）があり、傅熹年（1981）前掲注8論文で詳しい検討が加えられた。その後、楊秉綸・王貴祥・鐘曉青（1988）「福州華林寺大殿」（『建築史論文集』第9輯、清華大学出版社、1988）で復元的な考察を含む詳しい調査成果が発表されている。
- 15) 元妙観三清殿については、林釗（1957）「莆田元妙観三清殿調査記」（『文物参考資料』1957年第11期）があり、やはり傅熹年（1981）前掲注9論文に取り上げられた後、陳文忠（1996）「莆田元妙観三清殿建築初探」（『文物』1996年第7期）で、復元的な考察がなされた。
- 16) 調査報告として、杉野丞・沢田多喜二（1992）「福建省羅源の陳太尉宮について 中国華南地方の建築の研究(1)」（『日本建築学会東海支部研究報告集』30、pp.629-632）があり、張十慶（1999）「福建羅源陳太尉宮建築」（『文物』1999年1期）では詳しい様式の検討がなされている。なお、管見の限り、断面図は国家文物局（2007）前掲注13『中国文物地図集 福建分冊』に掲載されるのみである。
- 17) 福建省文物管理委員会（1959）前掲注5論文、張步騫（1982）前掲注5論文。傅熹年（1981）前掲注9論文も主に後者を引用している。
- 18) 楼建龍・王益民（2009）「福建順昌宝山寺大殿」（『文物』2009年第9期：pp.65-72）
- 19) 陳文忠の報告では正面に孫廂が付いておらず、正面に内法高の繋貫のほぞ穴が開いた写真が掲載されている。鈴木が訪れた2012年には新材による孫廂が付いていた。この間に、ほぞ穴に基づき復元がなされたようだ。
- 20) 弥陀岩石室については、関口欣也（2005）前掲注5論文を参照した。
- 21) 関口欣也（2005）前掲注5論文。
- 22) 林咸吉等（1967）『古田県志』中国方志叢書〔華南地方〕第100号、成文出版社
- 23) 北京図書館古籍出版編輯組編（1988）『弘治八閩通志 康熙福建通志』北京図書館古籍珍本叢刊34、書目文献出版社
- 24) 林登翔（1957）「古田県的古代建築“吉祥塔”」（『文物参考資料』1957年第11期）
- 25) 林登翔（1960）「閩侯県の宋代千仏宝塔」（『文物』1960年第3期）。関口欣也（2005）前掲注5論文も林（1960）を引用している。
- 26) 崇福寺庚応塔については、関口欣也（2005）前掲注5論文）がとりあげ、後述の釈迦文仏塔とともに積上式斗栱の使用を裏付ける建築と位置付けている。
- 27) 呉天鶴（1997）「福建莆田広化寺釈迦文仏塔」（『文物』1997年第8期）
- 28) 古くは、Gustav Eche and Paul Demieville（1935）*The Twin Pagodas of Zayton*, Harvard University Press, があり、すでにこの中で東大寺南大門の挿肘木を取り上げている。これについては、梁思成（1941）『書評 泉州双塔・石造「亭塔」之結構研究』（『中国营造学社彙刊』第6巻第3期）が中国学界に紹介している。その後、林釗（1958）「泉州開元寺石塔」（『文物参考資料』1958年第1期）に簡単な報告があり、また張志君・童文陞・葉碧榕（1989）「刺桐双塔近景撮影測量」（『文物』1989年第1期）では、写真測量の成果から、既出の立面図に修正が施されている。
- 29) 「六勝塔」（『文物参考資料』1956年第12期）で簡単に紹介されている。また傅熹年（1981）前掲注9論文で六勝塔を取りあげている。
- 30) ベトナムの民家にみられる登り梁と遊離尾垂木との共通性については、建築学会協議会「大仏様の源流を求めて」（前掲注9）において、林良彦「大仏様の源流に関する一試論」がホイアンの民家を例に指摘している。
- 31) 清水重敦（2013）「古代建築における尾垂木」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）』）。
- 32) 浅川編（2013）前掲注3報告書

参照 Web サイト

- 1) 『百度百科』甘露寺
<http://baike.baidu.com/view/163348.html>
 - 2) 「遊離尾垂木の発見」
<http://asalab.blog11.fc2.com/blog-entry-630.html>
 - 3) 「遊離尾垂木の再発見」
<http://asalab.blog11.fc2.com/blog-entry-642.html>
- ※参考 URL は全て2013年10月21日現在

（受付日2013年10月21日 受理日2013年11月21日）